

日本看護歴史学会 会報

日本看護歴史学会
第 19 号
1994年10月1日

戦後五十年を前に思うこと 隅田川の花火と東京大空襲

鵜沢陽子

平成六年七月、第二十回日本看護研究学会の帰途、総武線の電車の窓越しに華やかな隅田川の花火を生まれて初めて垣間見た。

私の座席の前には新宿駅から乗車した色鮮やかな浴衣姿の若い女性数名が、賑やかに楽しげにお喋りしながら両国駅で下車した。

敗戦から四十九年、林立するビル、高速道路、屋形船、敗戦時の痕跡は今や全く跡形もない。

しかし、私には五十年前の消し難い記憶が昨日のことのように鮮明に甦る。

昭和十九年八月、国民学校四年生の兄を集団疎開で見送った両国駅。同二十年三月九日夜の大空襲、

母と共に避難した指定の二葉国民学校。一挙に押しかけた避難民で満員電車さながらの校庭。

母の瞬時の判断で震災記念堂へ再避難。人影もない庭内の区役所側の入口に佇み、火の粉を払いながら見つめ続けた次々に燃え上り、焼け落ちた家々。

十日、燦んだ太陽、目も開けられぬ強風、一望千里と化した焼野原の中を乾パンの配給を受けるためにアサヒビール株式会社まで清澄通りを北上した。焼跡に散乱する焼死体。全身真白な包帯に包まれた負傷者達。

十二日、隅田川から引き上げられた多数の遺体が並べられた隅田

公園。父の遺体が見つかった同愛記念病院の死亡室。

隅田川の川岸に展開された悪夢のような光景、私にとっての原風景がそれである。

四十年後、兄の集団疎開の引率教師の日記が教え子の協力で『藤葉記』（清水晃著）として出版された。書名は最初の疎開地千葉県の葉、再疎開地岩手県藤沢町の藤からとって命名されていた。

この書で再びあの夜の二葉国民学校の惨状を知ったのである。東、南、西（正門）門の開門と同時に殺到した千人もの避難民。火は強風に煽られてコの字型、

三階建校舎の南西角に襲いかかり西、南、北側校舎へと、更に避難民の荷物に燃え移り、「学校は大きな火の塊となって……」人々は熱風・焦熱から逃るためにプールになだれこんだ。やがて、「プー

ルの中は動かない人で全く水も見えない程に……」「焼死者は校庭の講堂附近と玄関口に累々として目をおおうばかり……」と一夜にして水泳王国二葉のプールも学校も墓地と化してしまったのである。

玄関口から逃れなかったら私も辿った運命である。日記は更に疎開地での緊迫したあの日の状況も伝えている。

次々と入る家族の消息、悲報。いずれにしてもこの悲劇をもたらした近因・遠因、その是非の究明と悪夢の再現の防止を考え続けることは生き残った人間の、人間としての当然の責務と思う。

村山首相は東南アジア歴訪後、来年の戦後五十周年を意義ある節目の年とするために、二本の柱から成る「平和友好交流計画」を提唱。その第一に過去の歴史を直視するため、歴史図書資料の収集、研究者に対する支援等歴史研究事業をあげている。（平六・八・三一）

これからのかという思いもあるが、国際社会に生きるこれからの、戦争を全く知らない人達のためには不可欠な国の遺産としての事業と思う。

臨床看護婦の時代、多くの患者の臨終に立ち会った。家族、親族、職場の同僚、先輩、後輩、友人、医師、看護婦に看取られながらの人間らしい人生最後の儀式。この場に臨んでいつも脳裏に去来したのは、あの原風景にいる死者達であり、父の臨床である。

あの空襲体験者にとって、夏の夜空を彩る華麗な花火に心から酔いしれる日はあるのであろうか。私の記憶は一向に風化しない。

日本看護歴史学会
第八回総会報告

亀山 美知子

去る八月一九日、東京大学山上海館大会議室において、本会の第八回大会総会が開催された。冒頭で議長団選出を行ない、山本捷子、福本恵両氏が任に当った。

一九九三年度（一會計年度は八月〜七月）決算、一九九四年度予算案はいずれも承認された（別項）。

一九九三年度の活動および事業報告については、一八七四年八月に医制が發布されたことを記念し、「産婆一二〇年」として大会開催を行なうとともに記念テレカの作製と販売を行ない、現在までに三千五百枚を作製した。また、八月に関西で初の学習会を開催した。

機関誌『日本看護歴史学会誌』の発行は、この数年遅配が続いたが、予定の発行期日の出版に返ることができた。加えて、ISBNの登録が行なわれ、研究誌としての体裁が整えられた。鶴沢・草刈両幹事の努力に負うところが大きい。

一九九四年度活動方針および事業方針について

一九八七年創設の本会は、二年後に設立二〇年目を迎える。このた

め、一部には学術団体への加入を求め、一部の声も聞かれるが、現状はその域には遠く及ばない。すでに数年来、研究的体質の向上を目指してきたが、今後の会の維持発展のためにも、若年の研究者の育成を目指したい。

次に事業としては、来年が「戦後五〇年」の節目の年に当るため、各界で様々な取り組みがなされるであろうが、本会としても看護史上の検証・提言を考えたい。

また、前述のとおり、具体的な研究体制強化を目標として、各地での学習会の開催等を積極的に実施したい。なお、今春以降、広島近畿で学習会を開催している。

来年度の第九回大会の開催予定地は、京都が候補地となった。

会場より質問のあった本会会員数は約二六〇名であったが、大会会期中に二七八名となった。なお、次年度の会計監査は大村・徳川氏。

◆第八回大会実施協力の御礼

杉本郁子氏、吉川龍子氏、花島俱子氏、滝岡隆子氏、小山千加代氏、大村春子氏（順不同）の各氏および非会員中島・高橋氏の御協力を得たので、紙面を借りて御礼を申し上げる次第である。

日本看護歴史学会 1993年度会計報告

収入の部

(単位:円)

項目	予算額	決算額	差し引き額
前年度繰り越し金	792,417	792,417	0
会費	600,000	579,000 会 員127口 新入会員 18口	▲21,000
寄付金その他	10,000	76,354 会誌等売上(70,966) 利息 (5,388)	66,354
合計	1,402,417	1,447,771	45,354

日本看護歴史学会 1994年度予算案

収入の部

(単位:円)

項目	予算額	備 考	前年度決算額
前年度繰り越し金	436,650		792,417
会費	600,000	150名×4,000	579,000
寄付金その他	30,000		76,354
合計	1,066,650		1,447,771

支出の部

(単位:円)

項目	予算額	決算額	差し引き額
事務経費	200,000	332,238	▲132,238
印刷費	(40,000)	(26,205)	
通信費	(150,000)	(224,742)	
その他	(10,000)	(81,291)	
幹事会開催費	150,000	116,053	33,947
出版費	300,000	283,250	16,750
会報発行費	(100,000)	(82,400)	
		16号 41,200	
		17号 20,600	
		18号 20,600	
学術誌発行費	(200,000)	7号(200,850)	
会員名簿費	0	0	0
総会費	50,000	50,000	0
分科会費	20,000	2,980	17,020
予備費	682,417	226,600	455,817
		学会誌6号印刷費	
合計	1,402,417	1,011,121	391,216

次年度への繰り越し額

収入額1,447,771円-支出額1,011,121円=436,650円

支出の部

(単位:円)

項目	予算額	備 考	前年度決算額
事務経費	240,000		332,238
印刷費	(40,000)		(26,205)
通信費	(150,000)	会報3回 学会誌1回	(224,742)
文具、その他	(50,000)		(81,291)
幹事会開催費	150,000		116,053
出版費	300,000		283,250
会報発行費	(100,000)	年3回	(82,400)
学会誌発行費	(200,000)	年1回	(200,850)
会員名簿費	0	1回/3年	0
総会費	50,000		50,000
分科会費	20,000		2,980
予備費	306,650		226,600
合計	1,066,650		1,011,121

会計監査 大村春子 ㊞

分科会報

五十嵐 節

第八回分科会は、八分科会に別れ活発な意見交換が行われました。一、ナイチンゲール

『労働者階級のための看護覚え書』話題提供 小玉香津子。参加者一名。出版背景の特徴、第二版の要約、書き直し、欄外のNote、部分の削除、「赤ん坊の世話」を一つの章にした。一八六八年発行のものに看護婦募集の広告掲載、超廉価、看護を使って生きていくための一般向けのやさしい表現であるなどの提供に読者像をさぐった。二、文学・映像にみる看護

『詩人・画家、竹久夢二(一八八四〜一九二四)の病床遺録を読む』話題提供 高田節子。参加者一〇名。最後は結核のため、長野県で療養、その間に病床遺録を残した。夢二みずからの感情と向い合っていく病氣―死のことなど遺録を読みながら病床での死の考察をした。三、看護教育史

『陸軍病院における敗戦直前の看護婦養成の実状をさぐる』話題提供 岸本多恵子。参加者八名。聞き取り調査の結果について報告。昭和一九年、栃木・東京・埼玉に六カ月の看護婦養成教育があ

った。六カ月集合教育をし、あとは実習という形で各病院に分散させられた。終戦の二〇年には三カ月と短縮されたことなどを意見交換した。四、近代看護史

『京都帝国大学医科大学附属医

院開院当時における看護婦の職務について』話題提供 佐藤幸子。参加者六名。

新島襄の最後の看取りをしたのが、京都看護婦学校卒業生であり京大病院初代の婦長、不破ユウであると報告した。三年前の看護学会では、慈恵医大出身の鈴木キク

だと報告されている。鈴木は短期間派遣されて看護に加わったというのが事実ではないかと考えられる。さらに事実を明らかにしたい。五、『京都府医学校・療病院における看護婦教育の始まりについて―慶応大学附属看護学校における看護婦教育(大正七年)と関連で』話題提供 中村幸枝。参加者六名。

慶応での看護婦教育と京都療病院での教育の初まりについての経過と研究を行っていく上での問題点について話しあった。当時の史料を丁寧に集め検討していく必要を再確認した。

六、看護教育史

『明治期における看護婦養成教育とその施設』話題提供 平尾真智子。参加者七名。

今回の研究の史料収集の方法、学校とは講習会レベルも含めた。看護婦養成の前に産婆学校がモデルになったのではないかと。各府県の養成史をまとめる必要がある。

看護学校が全国に広がっていく要因があるのかなど意見交換された。七、『GHQ占領期におけるサムス大佐の反共理念が看護労働運動に与えた影響』話題提供 田中幸子。参加者七名。提供者から史料・研究過程など補足説明があり、グループから埼玉にも起こった共産主義問題の貴重な報告、准看制度とGHQの關係など占領中と占領後の研究、インタビューの必要性などを確認した。

八、『GHQ 沖繩県の米国施設下での看護教育』話題提供 伊敷和枝。参加者六名。①米国施設下に於いて助産婦登用評価の高いのは何故か。②公衆衛生看護婦は保健婦との役割のちがいがあのか、或いは何故保健婦と呼ばなかつたのか。③沖繩の看護の歴史を明らかにすることにより、日本の看護教育の全体像を明らかにできるのではないかと。

(以上)

◆第八回大会

研究発表者と題目

1. 京都帝国大学医科大学附属医
院開院当時における看護婦の職務
について ○佐藤 幸子
岸根 滋子
南出 成子

2. 京都府医学校・療病院における
看護婦教育の始まりについて
○中村 幸栄
岩脇 陽子

3. 明治期における看護婦養成教育
とその施設 ○平尾真智子

4. 占領期におけるサムス大佐の反
共理念が看護労働に与えた影響
○田中 幸子

5. 沖繩県の米軍政下での看護教育
―第二次大戦直後から日本復
帰までの検討―
○伊敷 和枝
草刈 淳子
真玉橋ノブ

司会 鶴沢 陽子
コメント 亀山美知子
◆総合同会 草刈 淳子

第八回大会に参加して

福本 恵

「歴史研究とその方法」というタイトルに魅かれて、暑いさなか東京に出かけた。足もとから湯気のたつような道は、山上会館に続いてきた。近代看護教育発祥の地のひとつである東大構内にある。ゆったりとした座り心地のよい椅子に感謝して先生の講演を聞く。印象に残ったことは、門倉玄春の史料の中の「列設布篤」の文字に驚きつつ、当て字のうまさに感心した。そして、患者の多い、少ない月からどういふ病気が多かったのか推測すると楽しい。毎日数人なのが時に十数人になったりすると、さぞ、玄関の下駄があふれるようにいうのもうなづける。その他にグリフスのこともある。今まで名も知らなかったひとりの人の足跡をたどる興奮や、先生が思わぬところから、研究のテーマを導き出していかれるプロセスを学んだ。又、現地主義というか、事実のあったところに出向き、触れ、感じることで意欲が倍增する様子、さらにいろいろなおまけの話までついて楽しい。くさりではないが、

ひとつ思い出せば次々浮かんでくる。研究発表者を囲んでの分科会も意見がはずんでよかった。亀山幹事のお話も耳が痛いといわれるとおりでである。現在私も、何とか歴史研究のテーマを見出しつつある貴重な二日間であった。

ところで、一日目の総会に於て出た開催時期に関する問題である。八月は、どこの地域でもお盆に関連する行事が多い。京都では一週間程あとに地藏盆がある。町内の子供達0才から中学生までを対象にした祭事を含むイベントで、親睦も兼ねる。今回は、沖繩の方から十九、二十日の頃にあるそうだが、思えば、全国各地で家族・親族が集まり、にぎやかである。交通混雑もひどく、この間ははずした方がよいようだ。この大会を何か由来のある日にちなんで実施することもひとつの考えである。例えば看護の日のようにである。或いは、参加しやすいこの時期であっても、もっと前後にする等も考えられる。会場の都合もあり簡単ではないが、幹事の皆様にご検討をお願いしたい。また、来年も参加したいと思う。

日本看護歴史学会に看護の専門性の拠点とその発展を期待

伊敷 和枝

無限に広がる宇宙現象や人間社会の可能性と発展の拠点は歴史学にある。また、分科した専門の事象においても、歴史学の根拠なくしてはその信憑性や真髓の究めに容易でないことがいえる。それ故、歴史学の研究者や学者に傾倒するのである。

この度、看護歴史学会に参加し、イメージされたことは、看護史料を究め看護史学術の築きの努力は勿論のこと、看護の専門性の確立に通ずることに強く印象づけられた。分科会では、看護の領域を感じさせない一貫して看護の専門性に焦点され論じられ、各グループ発表で充分に反映されていた。なお、「今、あらためて看護教育の歴史を振り返る」の放談で三講師の長年のキャリアからにじみ出る発言が、即、看護の本質に触れ、三者の内容の論点を統合調整すれば看護教育歴史研究に構成されるのではと情熱の漲りを覚えた。それについて肩のこらない学会で、今回初めての参加

大会に

であるが、以前からの交流を錯覚するほどのムードであった。(本学

会が権威主義的な体質やムードとは無縁)①に由縁していることであろう。

看護を志す誰れをも自らの職業観に精進するにつれ、多少とも歴史観に通じたくなる心情は否めない。しかし、歴史研究の実際となると、歩と時間を要すれば、(蓋然性の高い根本)②史料を発掘し得るのか、その検索法を心しなくてはならない。ましてや、看護史の理論構築において、(叙述であること、十分に先行研究を踏まえているか、内容に独創性や一貫性があるか、生じた歴史ではなく、書かれた歴史が目指される等々)③個人差こそあれ歴史研究者相応に多分な精力と年月を要するものを実感している。私事のことになるが、第八回本学会の出題に際し、演題抄録の記述において「結果考察」の構成は特に必要とされぬという歴史研究の初歩段階での無知さを知った。

何事も興味さえあればよいことではなく、看護史研究に本腰を据え、本学会が学術学会に発展する正念の場になることを祈念してやまない。

私も看護歴史研究の一人として自覚し、慧眼を養いつつ生涯の活動としたい。感想文の機会を下さったことに感謝しつつ今後続く喜びとしたい。※注(一)の①②③は、本学会報六十七号のページ亀山氏記事より引用。

看護の歴史意識

新村 拓

暑い季節に行われる学会は疲れる。緊張も長くは続かず、睡魔に襲われる。それでも発表者の熱意に応えなければと、最後列の席でメモをとりながら大会二日目を拝聴させていただいた。

私は寡聞にして看護史の分野にこのような学会があるとは知らず、己れの無知と怠慢とをさらけ出すこととなったが、こじんまりとした分科会でみられた会員の真摯な姿勢、さらには老若とりませた発表・放談、沖繩の看護史等に新鮮さを感じた。だが、その一方で、会員の研究発表枠が少ないことに物足りなさを感じ、学会の運営等においても戸惑いを覚えた。

大会の印象記となれば、本来、個々の発表内容について簡単なコメントを付さなければならぬが、それを果たすだけの紙幅も、またその能力も持たせないので、一般論でお茶を濁させていただく。現在、医学史の分野でもそうであるが、看護史においても大学教育の中にきちんとした位置づけのなされている所はほとんどないであらう。ポストがないため人材も育たず、予算もつかない。日本医学史学会は百年の歴史をもつが、医学史教室を有する大学はわずかに順天堂大学一校である。今春、横浜市立大学に置かれていたそれは閉室の憂目にあっている。

参加して

（非会員）

第八回大会に参加して

大蔵 多恵子

近年にない酷暑の中、第八回日本看護歴史学会大会に参加しました。

今から八年前、看護教育の教育技術を模索していた私は、その歴史をふり返る必要性を感じ本学会に入会したのですが、なかなか大会には参加できませんでした。しかし、今回はテーマがテーマだけに、何をしても参加しようと思いに決めていたのは言うまでもありません。

大会は研究発表、講演、分科会、放談会、問題提起と盛りだくさんでしたが、それぞれがコンパクトで小気味よさを感じました。研究発表では看護教育の歴史の重みを、講演では歴史研究のおもしろさを、分科会では様々なものからみ合う看護の奥深さを感じる事ができました。そんな中で、特に今大会で考えさせられたことは、看護研究と歴史研究についてでした。研究とは、こむづかしい定義を

無視するならば一種の謎解きです。そして、歴史研究はその謎解きの最たるものでしょう。

問題提起で亀山氏も述べておられたように、最近の看護研究は数値やセオリーばかりが目立ち、脳ミンがゾクゾクするような、スリルとサスペンスに満ちた謎解きの色彩が失われつつあるように思います。

歴然たる事実として存在する過去の出来事を、一つ一つ組み合わせ、謎を解いていく歴史研究は、今後、看護研究の中で重要な位置を占めるのではないかと思います。また、看護学が学問として歩を進めていくためのパワーは歴史の中にかくされているのではないのでしょうか。

暑い夏の熱気につつまれた、改造中の東大キャンパス内を歩きつつ、この状況はまさに今の看護研究、あるいは看護界そのものかもしれないと思わずにはいられない二日間でした。



大会印象記

藤田 美砂子

記録的な猛暑の真ただ中に、看護歴史学会大会に初参加させていただいた。歴史の学会ということで、激しいやりとりがあるのではと、内心は怖れと期待を抱いていたが、予想に反して、熱心ながら落ちついた会で、出席者の方々の「優しさ」が第一印象だった。考えてみれば看護にかかわる方々が優しいのは当然で、それが医療を底から支えているのだ。

今後、看護の重要さは増すばかりだが、福祉社会のヴィジョンは看護の医療・教育現場を抜きに語り得るものだろうか。歴史は過去の遺物ではなく、そこから普遍性をとり出し、現在を照らし出せたときに甦ると思う。看護関係者が歴史を探り今の状況をプロの立場で客観的に見る目を持ってこそ、優しさが主体となる、より豊かな医療・福祉が実現されていくのではないだろうか。この一年間ナイティングール伝の編集に没頭しつつそんな事を考えていた。

所属はまちまちの出席者が一様に、「歴史を知る大切さを痛感して」参加したと話されていたのが印象的で心強かった。

日本看護歴史学会第八回大会
収支決算報告書

△収入▽

大会参加費	二五二、五〇〇
会 員 七三名×二、〇〇〇＝一四六、〇〇〇	
非会員 三二名×三、〇〇〇＝九六、〇〇〇	
学 生 七名×一、五〇〇＝一〇、五〇〇	
懇親会参加費（一、〇〇〇×五八名）	五八、〇〇〇
大会総会費	五〇、〇〇〇
合 計	三六〇、五〇〇

△支出▽

講師謝金・お車代（一名）	五〇、〇〇〇
放談会講師謝金・お車代（非会員二名）	一〇〇、〇〇〇
放談会講師謝金・お車代（会員二名）	一〇、〇〇〇
放談会講師へ記念テレカ贈呈（四名）	三、二〇〇
講師昼食代	五、二五〇
会場使用料	五八、七二〇
幹事・世話人昼食代	六、四七〇
懇親会	五四、六八七
アルバイト代（二名×二日）	三〇、〇〇〇
コピー代・テープ代・宅急便	二二、六三八
合 計	三三一、九六五

△差し引き残高▽

三六〇、五〇〇円－三三一、九六五円＝二八、五三五円

△累積残高▽

前年度までの繰り越し金	五四〇、八三三
本年度残高	一八、五三五
累積残高	五五九、三六八

（次年度に繰り越し）

（会計 依田和美、大平政子）



会 場

◆「日本看護歴史学会誌」
第七号の訂正

第七号中の「文献目録」中、「個人史」および「第一三回看護科学学会発表題目」の冒頭の発表者大石杉乃氏のお名前が違っておりますので、お詫びして訂正いたします。

事務局だより

◆新入会員 ()内は所属

- 當山富士子 901-21 浦添市大平一 一二
- 二一 一 (琉球大学保健学科)
- 平尾真智子 185 国分寺市光町 アパ
ード六二〇一
- (慈恵看護専門学校)
- 高橋たま江 344 春日部市中野七二四
一三
- 穠村 愛 162 新宿区早稲田鶴巻町五
六六 岡芳第二ビル二〇一
- (日本看護協会調査研究室)
- 吉田時子 433 浜松市根洗三八五 一
- (聖隷クリストファー看護大学)
- 佐藤佐栄子 362 上尾市大字瓦葺二〇
二六 一 二
- (上尾市医師会看護専門学校)
- 竹谷英子 458 名古屋市緑区篠の風二
一八九 一
- (名古屋市立大学看護短大部)
- 遠矢福子 910-01 福井市河増二九一五
一二 県公舎二一〇
- (福井県立大学看護短大部)
- 田中道子 458 名古屋市緑区篠の風ほ
ら貝三一二三八
- (名古屋市立看護短大部)
- 白石寿美子 350-13 狭山市上広瀬二五
一九 一 つつじの団地一 一〇
- 一〇三 (慶應義塾看護短大)

中村由美子 123 足立区西新井本町五
一九 一 二九

(慶應義塾看護短大)

伊敷和枝 901-01 那覇市宇栄原七五四
(琉球大学保健学科)

牛島利明 152 目黒区平町二 一 一六 一
一 (慶應義塾大学商学部)

山本裕 二 181 三鷹市深大寺 一 一 二 一
一 コーポタバニ 二〇六

(日武蔵野短大)

佐藤恵子 320 宇都宮市上戸祭四 一 一
二 一 二 三 (国立療養所埼玉病院
付属看護学校)

條原ひとみ 760 高松市松島町二 一 一
二 一 三 〇 一 四 〇 一 (高松市民病院)

砂川洋子 (琉球大学保健学科)

森山悦子 910-01 福井市石盛町一五 一
三 四 一 四 (福井県立大学看護短大部)

藤田美砂子 112 文京区小石川四 一 一
八 一 三 (時空出版)

大石杉乃 113 文京区湯島四 一 六 一 一
二 一 六 一 三 (北里大学大学院)

中条篤子 336 浦和市岸町六 一 四 一 二
(大宮市医師会看護専門学校)

山本美津子 154 世田谷区弦巻二 一 三
一 一 六 (聖母女子短大)

◆住所変更

- 泊 祐子 ↓ 520-01 大津市大江一 一 三
一 五 一 二 一 〇 へ
- 市橋恵子 ↓ 803 北九州市小倉北区井

堀一 一 三 一 五 西南学院大学保
健福祉部へ

都甲綾子 ↓ 873 大分県杵築市大字熊

野二九 〇 〇 一 二 二 へ

柳田恵子 ↓ 669-23 兵庫県多紀郡篠山
町池上二七七 一 四 〇 へ

◆所属変更

岡田麗江 ↓ 大阪府立看護大学医療
短期大学部へ

松野睦子 ↓ 帝京山梨看護専門学校
杉本郁子 ↓ 日本大学理工学部大
院修士課程へ

田中幸子 ↓ 横浜大学法学部大学院
博士課程へ

◆改姓・住所変更 ()内旧姓

伊藤ちぢ代 (末永) ↓ 651-22 神戸市
西区美賀多台五 一 九 一 一 二 へ

鈴木朋子 (船原) ↓ 125 葛飾区青戸
三 一 一 二 一 三

◆所属施設退職

亀山美知子、瀬戸順子、鈴木一子、
船木ノブ子、都甲綾子、浜田博子

◆退会者

難波茂美、岡部登美子
(以上、敬称略)



放談会

◆日本看護歴史学会誌第八号の原稿募集について

左記の投稿規程に基づいて原稿の募集をしますので、日頃の研究成果を奮って御投稿下さい。

「日本看護歴史学会誌投稿規程」

- 一、論文原稿は未発表のものに限る。
- 二、原稿用紙は原則としてB5版四百字詰縦書きを用いる。
- 三、編集委員会において、特に枚数を指定するもの以外の論文原稿は、原稿用紙五〇枚以内とする。図版・写真などは一葉を原稿用紙一枚分とみなす。
- 四、原稿には必ず原稿用紙一ないし二枚の要約を添付する。
- 五、原稿には表紙を付し、表題、英文表題、著者名、所属機関名、連絡先を表記し、編集委員会事務局宛に送付する。
- 六、特に編集委員会が必要と認める場合には、掲載料を徴収することがある。

◆応募締切 一二二〇日(当日消印有効)

◆原稿送付先 京都市上京区清和

院口寺町東入ル中御霊町四一〇
京都府立医大医療技術短期大学
部 玄田公子気付「日本看護歴史学会編集委員会」宛

◎「応募原稿在中」と朱書のこと。尚、投稿された原稿は返却いたしませんので御注意下さい。

看護史一口メモ ⑧

医師が病気になるたとき、看護婦はどのように映じるだろうか。「最も不可思議なるは赤十字社京都支部の設立に係る平安看護婦会より雇入れたる余が看護婦也。斯女や終夜余が病褥に侍して毫も倦怠の色なく、其状恰も病みたる父若くは兄の看護に従事するに似たり。(中略)彼の看護す可き憐むべき病者は彼に取りては尽く是れ父也母也兄也姉也弟也妹也。其間に貴賤尊卑の差別を見ざる也。(中略)嗚呼彼の優さしき心臓には唯職務の神聖といへることのみ鼓動する乎。如何に彼の心の華の美はしきことよ。」(近藤常次郎『仰臥三年』)

この看護婦の名は福知山出身の河瀬夏枝という。松村介右に心酔し、英語に堪能であった。医師の筆者は看護婦の存在を心より幸福として受け止めたという。(か)

会費納入のお願い
一九九四年度の会費未納の方は至急、左記の郵便振替口座に四千元をお振り込み下さい。

△振替口座▽
〇一〇一〇一五二一八五
日本看護歴史学会

編集後記

看護の歴史という、一見不要不急の研究領域にもかかわらず、なぜか会員は増えている。来し方、行く末を模索するにも不透明性が先行する時代だから、とは思いたくないものである。ロマンはいっの世にも素晴らしいもの！(か)

日本看護歴史学会会報第一九号

編集責任者 亀山美知子
発行責任者 玄田公子・岡山寧子
602 京都市上京区清和院口寺町東入中御霊町四一〇
京都府立医大医療技術短期大学部

日本看護歴史学会事務局
260 千葉市中央区亥鼻一八一一
千葉大学看護学部
看護実践研究指導センター
鶴沢陽子気付
(〇四三一二二六―二四五六)

ナイティンゲールの示唆に富むことばをテーマ別に編集

ナイティンゲールのことば

その光と影 好評発売中

As Miss Nightingale Said ...
Florence Nightingale Through Her Sayings—A Victorian Perspective

編集 モニカ ベイリー
訳 助川尚子
聖路加看護大学教授

現代イギリスのナイティンゲール研究の第一人者が、本邦初訳の資料を含めて、ナイティンゲールの著作・書簡、その他の第一次資料をもとに、示唆に富むことばを集めたもの。「ヴィクトリア時代の一家」「神のお告げ」「戦争と軍隊」「社会政策」「病院とその管理・運営」「女性」「看護の本質」「看護教育」「看護管理」などをテーマ別に編集し、各テーマごとに編者の解説が付けられている。ナイティンゲールのことばを、公平で客観的な視点から取り上げており、気軽に楽しく読めるように編集されている。ナイティンゲールの人物像を知るのに最適の書。

●A5 頁196 図5 写真6 1994
定価2,472円(税込) ¥400
[ISBN4-260-34151-0]

医学書院 1113-91 東京・文京・本郷5-24-3 03-3817-5657 (お客様担当)
03-3817-5650 (書店様担当) 振替 00170-9-96693